



国際ロータリー第2800地区 1959年6月9日創立

鶴岡ロータリークラブ

ロータリー：
変化をもたらす

例会場 東京第一ホテル鶴岡(鶴岡市錦町2-10)

例会日 毎週火曜日(12:30~13:30)

平成30年4月3日(火) 第2841回 例会 (本年度第34回)

4月17日(火)	RI規定休会
4月24日(火)	新入会員スピーチ 佐々木仁道君 長谷川浩二君
5月1日(火)	クラブ休会
5月8日(火)	ゲストスピーチ 酒井忠順氏

Eメール◎tsuruoka08@rid2800.jp ホームページ◎<http://www.tsuruokarc.org/>

会長報告

会長／木村 節

昨日4月2日、当社グループに13名の新入社員が入社しました。期待に満ち溢れこれから頑張っていこうという気持ちがとても強く感じられた入社式でもありました。

ただ心配なのは、新入社員中1/3が三ヶ月以内に辞めてしまうというデータがありました。退職理由は、様々ですが我々先輩社員としては一日でも長く働いてもらい、そして働き甲斐のある職場環境を作ることが重要な使命だと改めて感じました。

私も、本年4月で社会人40年になりました。今後まだ続く社会人生活をまだまだ充実させて行きたいとも改めて感じる今日この頃であります。

<第11回理事会報告>

1.3月16日うどん・そば打ち家族例会会計報告

収入合計 168.750円 支出合計 168.750円

赤字(親睦委員会負担金 62.750円)が決定事項です。

2.孟宗汁家族例会について

日 時 平成30年5月22日(火) 18:30~

場 所 紅屋 7.500円

登録料 会員 7.000円(クラブ負担 500円)
家族 3.000円

ローターアクト登録料 3.500円

ご案内 会津若松南RC 東京東江戸川RC(登録料 7.000円 宿泊費 7.000円)

招 待 米山奨学生 青少年交換学生+ホスト
ファミリー

3.鹿児島西RC訪問について

平成30年4月18日(水)~4月20日(金)

現在13名の参加。当クラブより、日本酒2本おみやげ

会員数	31名
出席	21名
出席率	77.78%
前々回確定出席率	75.86%

■ RI会長 イアン H.S. ライズリー

■ 地区ガバナー 鈴木 一作

■ 会長／木村 節 ■ 副会長／菅原成規 ■ 幹事／佐藤詩郎 ■ 会長エレクト／武田啓之
 ■ 会報委員会／阿蘇司朗・菅原成規・迎田 健・前田 優・真島吉也

事務局：山形県鶴岡市錦町2-68 鶴岡SSビル1F TEL (0235) 28-3375 FAX (0235) 28-3376

夜例会のメイクアップは自己負担4.000円
当日参加者より、日本酒(四合瓶)10本もお土産として持っていく

4.第27回ローターアクト地区年次大会について

移動例会扱いとする(前月理事会で承認済み)

登録料 式典 5.000円 レセプション 5.000円
クラブ負担 5.000円 自己負担 5.000円

5.例会休会日の変更について

RI規定休会日を以下のように変更する。

4月17日、4月24日、5月29日、6月19日とする。
尚、会員にはメールで事務局より連絡します。

6.60周年記念事業 報告

3月末に、地区補助金申請は完了しました。

但し、60周年事業としては補助金対象外となるため記念事業は削除しました。

4月13日(金)に、審議会が開催され諾否が決定します。

文芸の土壤を肥やしつづけて

らくがきクラブ名譽会長 畠山 弘氏



只今ご紹介頂いた畠山です。十数年前に山形のロータリークラブに依頼され、講演に伺ったことがありました。その時の事を、今皆様方がおやりになったセレモニーを見て懐かしく思い出しました。

去年の秋頃から口の中が工事中で、聞き悪いと思いますが勘弁願います。

この国が、戦争に敗れて文化国家に舵を切ります。その後十数年やっと目鼻が付いてこのあたりもその波が押し寄せていました。割合に優れた素質を持った連中が現われまして、文筆で活躍し始めました。その当時、詩歌句(しかし)俱楽部、「し」はポエム、

「か」は短歌、「く」は俳句。それぞれジャンルは異なっておっても、それらの連中が横に連絡を取りまして、壁詩展、それぞれの書いたものを壁に掛ける、そういう展覧会を開いていました。ここには白癡社が美術の方ではある訳です。その向こうをはるような勢いでした。これでこの鶴岡も文芸の都として北国ながらも華やかになっていくんじゃないかと、そう思っておったんですが、まもなく一人消え、二人消え、雲散霧消、詩歌句俱楽部も無くなってしまう。どうしてなんだろう。

昭和33年、高山樗牛賞がここで設定されます。蓋を開けてみると功成り名遂げたお年寄りばかり、詩歌句俱楽部の若手の連中がシラケてしまったのも当然でしょう。「なんだつまらねえ」ということで、辞めてしまう。これでは、せっかくの文芸の土壤も枯れてしまうなと若かった私はそんな事を本気で思っていました。これはなんとかしなくてはいけない。思いついたが吉日とばかりに、この地方で物を書いている連中に声をかけまして家に集まつてもらつた。鍋を囲んで一席設けました。飲むほどに、酔うほどにです。この会おもしの～。こげだ会いままでなかつた。このままこれで終わつてしまふのは、いかにももつたいないと、これだけようではあんめか、んだんだ。これがらくがき俱楽部の始まりだつたんです。ひょうたんからでたコマ。それからというもの、毎月のように、例会開いていました。ゲストも来ていきました。人数も20人30人、あらつていう間に一頃は、5、60人の会員集まつてました。ああでもない、こうでもないと文学談義、それが面白かったんでしょう。そのコマが走り回りまして、結局はこの土地の文学のあるいは文芸の土壤を肥やし続けてきたということになるかもしれません。まったくひょうたんからでたコマがありました。

樗牛賞は昭和33年の制定。らくがき文学賞を作つたのが46年。その一杯やつたのが、たしか30年の末頃でしたから、そんな状態で樗牛賞とらくがき文学賞というのは並行して続いてきた訳です。ところが、4、5年前に50年記念の会をやりました。その時に荘内日報に特集組んでもらつたんです。その時の写真のコピーみなさん手元におあげしております。その写真は家で保管しておりますけれども、藤沢周平が家に時々みえていましたし、その周平を招いて、らくがき俱楽部で主催した囲む会の写真です。前列真ん中にいるのが、藤沢周平。左手にかまえているのが私です。若かった。この当時は良かった。

ところで、気がついてみますと、これどこまでも平行線をたどっている、そしてたどるもんだと思っておつたんですが、らくがき俱楽部の会員の中から樗牛賞を獲得した人が15、6人出ているんですよ。いつの間にやら平行線が交差線を描いておつた。これらくがき俱楽部の存在価値があったのかなあとそんな風に思つたしだいでした。

ある時、藤沢周平が家にひょっこり訪ねてきた。

善寶寺の縁年の年でした。善寶寺からなんか頼まれたらしいのです。帰りがけに彼が残していった言葉、これ忘れられません。「畠山はん、あんただば書きわりやの。俺あっちゃ居るはげ書がいんだ。」これ、ずしりときました。本当にここに居ると、このものは書きにくいんです。創作の根源にグサッと刺さってくる言葉だと思って受け取りました。書こうというものの、この地方のもの、あるいは周辺のものとなるとたちまち壁にぶち当たるんですね。あたりから罵詈雑言が飛んでくる。こんなもの嘘だ。これには藤沢周平も、あるいは一番がっかりきたのはここにねぐらをもつておつた森敦だったんでしょう。芥川賞をとつたあたり、もう散々でしたよ、悪口が。やっぱり、地方の文芸の土壤を肥すには見る目の温かさも必要だと思うんです。皆さんがた温かい目でこれからもそういう輩を見つめてもらえばありがたいと思います。

文学に携わるということは、もともと生れたのがこの土地だとすれば、風土によって生かされてきたわけ、三つ子の魂百までこれがこっちの言葉。向こうの言葉では、フロイトを借りれば、いわゆる人格を形成するその元となるのは、幼児体験、それがものをいう。書くということは、書きたいことがあるから書く、言いたい事があるから書く、これが原点です。としますと、書こうとした時には、まずは、自分を振り返って、あるいはあたりを見つめる。それが最初になる訳です。だからこの国の文学作品は私小説といわれる由縁でもあるのでしょう。賭して、そこへぶつかつていこうとすると、たちまち厚い壁が立ちはだかってしまう。書けば、石が飛んでくる。これじゃたまたもんじやないと思うのも当然だったでしょう。だけども人間は環境によって生かされている訳です。私なんかも地方に出ていこうとしても、出ていけませんでした。そういう環境にあったからです。少し温かい目があたりにあれば、文芸の土壤も肥やされる、そんなふうに思います。

► 委員会報告

◆ゲスト

マリエッタさん ジャスティン君

◆ビジター

鶴岡西ロータリークラブ 阿部悦子君

◆メイクされた方

藤川享胤君 阿蘇司朗君 小林健郎君 田村一美君
榎本久静子君 樋渡美智子君 富田喜美子君

😊スマイル

富田喜美子君 今日はご苦労様でした。庄内の文人についてのお話を興味深く拝聴させて頂きました。
樋渡美智子君 無事誕生日を迎えることが出来ました。最近は多忙で動き回っています。畠山さんの含蓄のある言葉、息子さんを担任しましたが、ご両親ともども素晴らしいでした。